【岡田會頭古稀記念論文】

氣管枝異物(鉛筆鞘)ノ一例

T. Yamamoto, Y. Kaku: Ein Fall von Bronchialfremdkörper.

昭和醫學專門學校耳鼻咽喉科教室

教授 醫學博士 山 本 常 一

助手 昭和醫學士 賀 來 康 寛

緒 言

種々ノ動機ニ依ツテ色々ノ異物が氣管枝内ニ迷入スルコトハ從來多數報告セラレテ居ルノデアルガ、一般ニ吸引ニ依ツテ異物が聲門ヲ通ツテ氣管ヨリ氣管枝内ニ達スルモノガ、ソノ大部分ヲ占メテ居ルノデアル。而シテソノ動機ノ主ナルモノハ口中ニ含マレタ固形物が急激ナル高笑又ハ驚愕、跌倒等ノ場合ニ起ル所ノ深い吸氣等ニ於テ吸引サレルモノガ多い。其他喉頭運動ノ靜止又ハ麻痺狀態即チ泥醉時、睡眠時、人事不省時等ニ於テ吸引サレルコトモアル。又彈丸や食道異物等ガ氣管枝中ニ入ルコトモアル。余等ハ最近氣管枝異物トシテ普通大ノ鉛筆ノ鞘ノ一症例ヲ經驗シタノデ左ニコレヲ報告シタイト思フ。

症 例

患者ハ十年五ヶ月ノ男子小學生デ家系ニハ特記スベキモノハナク、患者自身ハ今マデ至ツテ健康デ著明ナル疾患ニカ、ツタコトハナイ。病歴、昭和八年二月廿日午前十時頃授業中ニ普通大ノ鉛筆ノ鞘ヲ口デ抜キトラントシテ、吸引シテ誤ツテ氣管ノ方ヘ入レタノデアル。其鉛筆ト鞘トハ接合ガ極メテユルク、普通デアレバ手又ハ齒デ抜キトルノデアアルガ、單ニ唇デ挾ンデ抜キトルコトガ出來ル程デアツタノデアル。誤嚥當時ハ一時呼吸困難ヲ呈シタノデ、教師ナドモ心配シタガ、ヤガテ靜マツタノデ、一先ヅ小使ヲシテ自宅ヘ運バシメ、午後一時學校醫ノ診察ヲ受ケシ處、食道異物ナラント云ヒ、下劑ヲ與ヘ、其他多量ノ芋類ヲ攝取スルヤウニ命ゼラレタ。其後呼吸困難ノ發作ガ時々起リ、咳嗽ガ甚ダシカツタノデ普通ノ如ク食事ヲ取ルコトガ出來ナカツタ。夜間モ時ニ咳嗽ガツマイタノデアル。

二十一日 矢張り咳嗽發作ガアツタノデ胸部ニ濕布ヲ行フ。

二十二日 咳嗽發作増加、胸部ニ疼痛ヲ訴フ。

二十三日 咳嗽頻發、呼吸困難増加ス。

二十四日 朝九時頃洗顔ニ際シ、強烈ナル呼吸困難ヲ起シ、全身痙攣、「チアノーゼ」ヲ呈シ、約五分間ノ後稍々恢復シタノデ同日午前十時半頃當校附屬醫院小兒科外來ニ、犬吠様咳嗽ヲ主訴トシテ來リ、異物ノ患者トシテ我耳鼻科ニ廻送セラレタルモノデアル。依ツテ直チニ入院セシメ異物ヲ抽出セントシタ、即チ異物誤嚥ヨリ五日目デアル。

現症 患者ノ榮養ハ中等度、顔貌ニ著明ナル變化ハナイ、又現在ハ呼吸困難ハナク、時々輕度ノ咳嗽ガアル。胸部ニ乾性雜音ヲ聴取シ、腹部ニ異常ハナイ。口腔ニハ變化ナク、咽頭ニ於テハ口蓋扁桃腺ハ第一度肥大ヲ呈シ、咽頭後壁ノ顆粒中等度ニ發育セル外、異物誤嚥ニヨル咽喉ノ損傷ハ認メラレナイ。又音聲ニモ變化ハナカッタ。

ソコデ直チニX光線ニヨル透視ヲ行フニ右側氣管枝入口部ニ尖端ヲ下方ニセル細長キ異物―鉛筆ノ鞘ヲ明カニ認メタノデアル。治療、余等ハコノ異物ヲ下方氣管枝直達鏡検査法ニ依ツテ摘出セントシタノデアル。

先ヅ局所麻醉ノモトニ上氣管切開法ヲ型ノ如ク行ヒ「カニユーレ」ヲ挿入シテ一時呼吸ノ安靜ヲ計ツタ、手術時モ時々咳嗽ガアリ、套管挿入後モカナリ強イ咳嗽ガアリ呼吸困難ガ起ツタノデ「カニユーレ」ヲ拔去シテ氣管切開口ヲ觀察スルニソノ下方ニ鉛筆鞘ノ一部ト思ハル、金屬性ノ光リヲ認メタノデ鉗子ヲ以テ直チニコレヲハサシテ摘出シタノデアル。其後ハ呼吸ハ全ク安靜トナリ一般狀態モ良好トナツタ。次ニ念ノ爲メ創口ヨリ直達鏡ヲ挿入シテ検査スルニ氣管ニハ何等ノ變化ナク、タゞ分歧部位ト右側氣管枝ノ粘膜ハ稍々發赤シテ居ルヲ認メタノミデアル。依ツテ再ビ「カニユーレ」ヲ挿入シテ手術ヲ終ツタノデアル。

經過 其後ノ經過ハ極メテ良好デ體温ハ當日ハ三十七度五分ニ上昇シタガ翌日平温トナリ、呼吸困難、出血等モナク、肺炎ノ徵候モ現ハレズ、元氣モ恢復シタノデ二十五日「カニユーレ」ヲ拔去シ、皮膚缝合ヲ行ヒ、一週日後全治退院シタ。

考 按

本症例ハ右側氣管枝異物ヲ氣管切開ヲナシテ下方氣管枝検査法ニヨリ摘出シテ全治セル一例デ、該異物ハ眞鍮「ニッケル」鍍金性ノ鉛筆ノ鞘デアツテ鑄ナドハナク原形ノマ、デアル。其ノ長サ四・八糎デ、直徑ハ尖端〇・四糎、下端〇・八糎、重量ハ一・六瓦デアル。本例ニ於ケル異物ノ嵌入ノ機轉ヲ考察スルニ、口中ニ含マレタル鉛筆鞘ガ急激ナル吸嚥作用ノ如キモノニ依ツテ生ジタル口腔内陰壓ニヨリ氣道中ニ吸引サレタルモノト思ハルハノデアル。

氣道内ニ異物が嵌入スル部位ニ關シテハ荻野、田中兩氏ノ統計ニ依レバ喉頭六、聲帶下一三、氣管一二、氣管分歧部四、氣管枝右側二六、同

左側九、遊走異物四、トナツテ居ル。又久保（猪）博士ノ四十例ニ於テハ右側氣管枝三十一例（七七・五％）、左側氣管枝八例（二〇％）、移動性ノモノ一例（二・五％）デ、一般ニ右側氣管枝ニ異物が嵌入スルコトガ多イノハ明カナル事實デアル。本症例ニ於テモ矢張り右側デアツタ。コレハ解剖學的關係ノ然ラシムル處デ右側氣管枝ハ氣管長軸ヲ去ル事甚ダシカラザル上ニ稍々管腔ガ大キイノデアル。コレニ反シテ左側氣管枝ハ氣管長軸ト約五・〇度ノ角度ヲ作り、且ツ管腔ハ稍々小サイ。コノ爲メニ異物ハ先ヅ右側ノ方ヘ嵌入シ易ク、左側ノ方ヘハ入り難イノデアル。

異物ノ種類ニ關シテハ萩野、田中兩氏ノ本邦ニ於ケル明治廿八年ヨリ大正十五年ニ至ル綜合的統計ニ依ルニ、總計九十六例中六十四例ハ植物性及ビ動物性異物デ三十二例ハ鑛物又ハ金屬性異物デアツテ、ソノ内最多イノハ義齒ノ十二例デアル。又昭和元年ヨリ昭和八年七月迄ニ於ケル氣管枝異物ノ統計ヲトツテ見ルニ、總計三十五例中植物性二十五例、動物性二例、金屬性又ハ鑛物性八例デアル。コノ二ツノ統計ノ内ニテ鉛筆鞘ハ大正十五年以前ニ四例ノ報告ガアリ、其後昭和五年ニ久我氏ガ一例ヲ報告シテ居ルノデ都合今マデニ五例トナルワケデ、本例ヲ加ヘテ、我が國ノ報告例ハ六例トナルノデアル。

又年齡ニ關シテハ統計ニ依ルニ氣管枝異物ハ一歳ヨリ五歳マデノ間ガ最も多ク、約半數ヲ占メテ居ル。次ニ六歳ヨリ十歳迄、十一歳ヨリ十五歳マデガ多ク、以下漸次減少シテ居ル。

性別ニ就テ見ルニ氣管枝異物ハ女性ヨリモ男性ノ方ガ多クナツテ居ル。萩野、田中兩氏ノ統計ニヨレバ男性六〇例ニ對シ女性二十五例デアル。又九大ノ明治四十年ヨリ大正十五年迄ノ統計ニヨレバ男性六十五ニ對シ女性四十四トナツテ居ル。

又異物ノ種類ト年齡トノ關係ニツテ見ルニ、小兒ニハ大部分豆類、種子類、玩具類等デアツテ、六歳ヨリ十歳位マデハ本症例ノ如ク學用品ガ多ク、十歳ヨリ十五歳迄ハ、家事作業器具ニ變リ、二十歳ヨリ三十歳以上ニ於テハ義齒ナドガ加ハツテ來ルノデアル。

最後ニ氣管枝異物摘出ニツイテハ上氣管枝法ト下氣管枝法トガアル。前者ハ喉頭ヲ通ジテ直達鏡ヲ氣管枝ニ挿入スル方法デ、後者ハ氣管切開術ヲ施シ、ソノ創口ヨリ直達鏡ヲ挿入スル方法デアル。兩者ノ何レヲ選擇スルカハ術者ニ依ツテ又ハ異物ノ種類ニ依ツテコトナツテ居ルガ、下氣管枝法ニヨル方ガ安全デ且ツ確實デアル。即チ上氣管枝法ニ於テハ時トシテ術後喉頭浮腫ヲオコシテ呼吸困難ヲオコスコトガアリ又大ナル異物ノ時ハ聲門ヲ通ジテ摘出スルコトガ困難ナル場合ガアル。之レニ反シテ下氣管枝法ニ於テハ異物ヲ直下ニ近ク見出し、何等ノ障害ナク、大ナル異物ト雖モ摘出スルコトガ出來ル。コトニ舞踏性異物デアル時ハ咳嗽ト共ニ異物が創口ヨリ咯出セラル、コトハ決シテ少ナクハナイノデアル。

山本・賀來論文附圖

氣管枝異物(鉛筆鞘)ノ一例

Fig. 1.

Fig. 2.

摘出セル鉛筆ノ鞘(實物大)

舞踏性異物トシテハ豆類ヤ種子類ノ小サナ、輕イ植物性ノモノガ多イノデアルガ、本例ノ如ク一・六瓦ノ金屬性ノ異物ガ舞踏性異物ノ如ク右側氣管枝ヨリ咳嗽ノ爲メニ創口近クニ咯出セラレタト云フコトハ珍ラシイコト、思ハル、ノデアル。今病歴ヲ見ルニ本例ニ於テハ異物誤嚥後時々發作性ニ呼吸困難ヲオコシ、コトニ初診當日ノ朝ハ高度ノ呼吸障害ガアツタコトヨリ考フルニ已ニ初メヨリ舞踏性異物トシテ、喉頭ト氣管枝ノ間ヲ上下シテ居タノデハナイカト考ヘラレルノデアル。

總括

(一)、本例ハ十歳五ヶ月ノ男子小學生ガ誤ツテ鉛筆ノ鞘ヲ嚥ミ込ミ、ハジメ食道異物ト思ハレタルモX光線ノ透視ニヨリ右氣側管枝内ニア
ルコトガ明カニサレタルモノデアル。

(二)、異物ハ下氣管枝直達鏡使用法ニヨツテ摘出セント企テ先ヅ氣管切開ヲナシタルニ咳嗽ト共ニ創口ニ近ク鉛筆ノ鞘ノ一部ヲ認メタノデ直チニ鉗子ヲ以テ取り出シタノデアル。ソノ後ノ經過ハ極メテ良好デアツタ。

(三)、鉛筆ノ鞘ノ氣管枝内異物トシテハ我が國ニ於テハ從來五例アリ、本例ヲ加ヘテ六例トナル。

(四)、斯ル金屬性ノ異物ガ所謂舞踏性トナリテ氣管切開口近ク迄ニ咯出セラル、コトハ稀有ナル事ト思フ。

文獻

- 1) 萩野朝一・田中芳次郎 愛知34卷1號、2) 中村豊 大日耳草34卷、2) 渡邊武雄 同34卷、4) 江浦重成 同34卷、5) 渡邊武雄 同35卷、6) 豊田邦二 同36卷、7) 佐木寛 同37卷、8) 田中芳次郎、喜多島恒丸 同36卷、9) 富田靖一 同37卷、10) 田中一弘 同37卷、11) 田中一弘 同38卷 12) 鈴木俊次 耳鼻 2、12) 立木豊 同2、13)、久我廣久 同3、14) 丸山正夫 同3、15) 井上忠三郎 同4、16) 濱野同4、17) 江浦 同6、18) 山川彌四郎 同3、19) 石井正 醫學雜誌—治療法分冊第二 (原稿刊登—昭和八・九・一三)